

Imajin21

今
人
創
造

おかげさまで
21号

奈良の 三宝
伝統工芸
(株)北浦木工所

この度、当誌はタイトルに標榜します「21号」を迎えました。創刊10年・21回に渡り、歴史に耕されてきた奈良に視点を据え、歴史・文化、さらには印刷に関わる事にスポットを当ててきました。21号となります今号は、これまでの歩みを見つめ直し、新たな門出とする良い機会であると考えています。

そこで、「第21号記念企画」と銘打ち、奈良学で著名な青山茂先生をお招きし、発刊責任者である私との対談を催しました。また、新連載「奈良のartist」では、奈良の社寺に所縁の深い日本を代表する仏像写真家の小川光三氏に仏像の癒しと内面にある祈りの心について語って頂きました。

著名な方々の見識に触れ、古都の精神を未来に繋ぐわたしたちイマジン21は、その役割を今一度明確にし、誌面の充実を図り、皆様の共感を頂きながら、この地に根づく精神を発信し続けたいという想いを強くいたしました。

代表取締役社長 近東 宏光

Imagin21



「イマジン21」第21号記念企画対談

奈良の温故知新 1 ~ 3

奈良の artist 01 小川 光三 4 ~ 5

まちかど探索 奈良県立民俗博物館 6 ~ 7
大和民俗公園

奈良の伝統工芸 12 「三宝」 8 ~ 9

Essay 印刷文化逍遙 21 10 ~ 11

特集 奈良の城 式 信貴山城 12 ~ 13

付録 文庫本力バー

職場風土改革促進事業への取り組み

少子高齢化社会にあって、これからは益々多様な働き方が企業に求められております。一方、働く人は、仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）をより重要視する中において、企業としてはそれらを必要十分に充足する環境づくりが不可欠であります。

弊社は、平成14年にはISO14001を認証取得、また18年にはプライバシーマークを取得するなど、時代のニーズに合致した経営推進に努力してまいりました。そして、労働時間等設定改善法が施行されて（平成18年）以後、社内で委員会をたちあげ「有給休暇を取得しやすい環境づくり」をめざし、残業が避けて通れない業界にあって、残業時間を少しでも減少する努力なども含め企業理念の中にある「人間生活の向上」に邁進したいと考えております。

人間生活の向上とは、従業員の仕事と家庭の両立を支援することでも大きく関係しており、具体的な取り組みは下記の通りです。

- 取組 具体的な
- 1 仕事と家庭が両立できる働きやすい会社作り（ワーク・ライフ・バランスの推進）
 - 2 育児・介護休暇制度の充実を図る
 - 3 その制度を利用しやすい環境作り
 - 4 管理職層への研修の実施
 - 5 両立支援制度の労働者への周知徹底

代表取締役社長 近東 宏光



わたしたちができる環境づくり

自然との共存を図りながら
限りある資源を大切に使い環境を守っていく—
私たちは時代に役立つ企業であり続けたいと考えます

編集/制作/発行
共同精版印刷株式会社 <http://www.kspkk.co.jp/>

本社：〒630-8013 奈良市三条大路2丁目2-6 TEL 0742-33-1221 FAX 0742-33-7035
大阪支社：〒542-0082 大阪市中央区島之内1丁目12-3 TEL 06-6271-7951 FAX 06-6271-7954
東京支社：〒116-0014 東京都荒川区東日暮里5丁目6-4 TEL 03-3802-4741 FAX 03-3802-4740



ミックス品
責任ある森林管理のマーク
www.fsc.org Cert no. SA-COC-001747
© 1996 Forest Stewardship Council



「イマジン21」第21号記念企画対談

奈良の

奈良学研究者

青山 茂



近東 宏光

共同精版印刷株式会社社長

日本の黎明期、奈良の地はずでに力強く鼓動を打っていました。平城京に国家機能を統括していった時代には日本の中核でした。歴史と文化の揺籃の地・奈良を伝える『イマジン21』の第21号記念として、「奈良学」を唱える青山茂氏をお迎えして、日本の精神的原点である奈良について語り合いました。

近東 奈良学は青山先生が元祖だと思っているのですが、奈良学とはどんなものか、先生からご説明いただけますか。

青山 奈良学の先人はたくさんいます。本居宣長もそう。彼が

温故知新





近東 宏光[こんどう ひろみつ]
1940年生まれ。80年から共同精版印刷株代表取締役社長。他に奈良工業会副会長、奈良県防衛協会会長など。印刷業界や奈良の文化情報を手づくりメディアで発信しようと、21世紀を控えた2000年から社外報「イマジン21」を発刊している。

奈良が元気になることばかり考えています

『古事記伝』を著すにあたって奈良を訪れた期間は二週間ですが、『菅笠日記』にはそのとき

の見聞が記され、江戸期の大和を知るにはとても重要です。

「大和」は一地方であり、同時に日本全体を指します。大和、つまり奈良の歴史は日本全体の歴史と一体不可分の関係にあります。けれども、奈良の人がそれを忘れてしまつて、大和を一つの地方だと思つています。歴史は一つの地方だけを見ていると、見誤ることがあります。

奈良学・大和学は、郷土史や地方史とは立場を画するものです。奈良と日本の歴史は不可分であり、全体的な視野で勉強するのが奈良学といえます。

近東 奈良は二、三日で観光して回つても理解が追いつかないくらい奥が深い。平城遷都一三〇〇年祭が盛況ですが、経済・産業の視点で言うと、私は奈良

が元気になることばかり考えてしまいます。

青山 奈良は歴史的にも文化的にも日本になくはならない土地であるのに宣伝下手という感じがします。たとえば漏刻。水時計のことですが、時計の博物館を造るなどして「日本最初の漏刻」を宣伝しているのは滋賀の近江神宮です。ところが日本書紀には、近江より古い斉明天皇六年（六六〇年）に漏刻が造られたとあり、飛鳥水落遺跡にそれが置かれていたのではないかとみられています。

大和にいい材料があつても、他の地方に取られていることがあります。奈良は人がいいというか、鷹揚（おつよう）だけれど、それが重なる埋没してしまいます。

近東 奈良商工会議所が主催する奈良検定二級に以前合格しましたが、参考書で猛勉強しなが

らも、合格しなかった人がいました。やはり本だけではダメなんです。必ず訪問して、現地を知つて、奈良の空気を感じる事が大事だということです。

青山 修学旅行などは、以前は京都からバスで来て、法隆寺と大仏を見物して、京都に帰り、京都に泊まるという日程でした。経済的には奈良で泊まつてもらふといいのですが、私としては、奈良へ来るのは日本の本質を訪ねることであり、そういう意識で奈良を見てほしいと思います。

近東 私は東京で十年生活したことがありますが、それ以外はずつと奈良です。奈良を離れた息子達は、帰ってくる時「ホッとすると、帰ってくる時「ホッとすると、ま、人のぬくもりがそう思わせるのでしよう。奈良以外のところから奈良へ来て、奈良にはまる人も多いように思います。

近東 私は東京で十年生活したことがありますが、それ以外はずつと奈良です。奈良を離れた息子達は、帰ってくる時「ホッとすると、帰ってくる時「ホッとすると、ま、人のぬくもりがそう思わせるのでしよう。奈良以外のところから奈良へ来て、奈良にはまる人も多いように思います。





青山 茂[あおやま しげる]
1924年生まれ。毎日新聞社奈良支局で11年間、文化担当記者。大阪本社で編集局部長などを経て、76年に帝塚山短期大学教授、95年から名誉教授。「大和寸感 奈良・大和路の昭和春秋」など著書多数。奈良学セミナーや講演活動も精力的に行う。

奈良・大和の歴史は 日本の歴史につながっています

青山 私はいまや大和の人間ですが、奈良生まれではありません。大阪の木津で生まれ、ほどなく一家で空気のきれいな奈良に移り住みました。

大和にどっぷりつかっている、大和の良さが見えにくいのかもかもしれません。ちょっと離れたら、ふるさとの見る目が特別になります。私も旧制高等学校時代に愛媛の松山におりましたので、それが大和を見直す契機になりました。

近東 振り返ると、平安以降、ものの始まりの奈良であるのに、中心から外されてきたように思います。茶道など奈良には揺籃がたくさんあり、それを誇りにするべきですが、奈良の人が奈良のことを意外と知らないのは残念です。

青山 奈良という環境は、恵まれません。

だから近くの良さが見えにくい。ですが、都が京都に移っても奈良が「南都」と「都」を付けて呼ばれたように、王朝時代になってもなお、奈良は精神的な価値を有していたといえます。

しかし中世になると、たとえば「南都仏師」は田舎仏師という意味で呼ばれるなど、京都から一段低く見られていた時期もありました。先ほど社長が言われた茶も大阪堺の千利休や京都ばかりが取り上げられますが、茶には村田珠光ら南都ゆかりの流れがあります。

近東 平城宮跡は長い間、土に埋もれていましたが、それをきちんと残そうと掘り出し、復元保存しようという取り組みがなければ、世界遺産は実現しなかったかもしれません。

青山 そうですね。奈良が忘れられた時代に、「いや、奈良は

こうやったんや」と奈良の人は言ってきました。時の中に埋もれて忘れられると、掘り出せば光る歴史が初めからなかったものと同じになります。

八世紀の奈良時代にあった文化というのは、当時としてはとてもなく斬新だったはず。想像を絶するような文化を国際的に受け入れる土壌が奈良にあったということですね。

近東 現代の人は歴史にロマンを求めています。明らかにしながらもいい歴史の一面もあるのではないのでしょうか。

青山 間違った勉強で生半可な理解をするよりは、分からないまま楽しんで方がいい。元文化庁長官の河合隼雄さんに「土地には土地の精神がある」と教えられたことがあります。古事記にヤマトタケルノミコトの歌として「倭（やまと）は国のまほ

ろばたたななく青垣」とあるように、大和には国のまほろばとして、人間を超越した土地の精神が宿っているのです。

近東 奈良もさまざまな形で変わってきました。奈良から日本全体をとらえる奈良学の精神を踏まえながら、これからの世代がこれからの奈良をどう変えていくのか。期待を持ちたいと思います。

青山 私は寺社や文化財そのものではなく、それらに関わる人間を通じて歴史を学んできました。功績を黙殺された人物に焦点を当てて歴史の偏りを見直すなど、調査し、書き残したいことがまだまだあります。イメージ21も奈良の情報を発信するメディアとして、古都の精神を未来に伝えてほしいと思います。

(二〇一〇年九月十七日収録)

奈良の
artist

01

写真家

小川

Ogawa Kōzō

光三

やんわりした光を受けて閑雅に佇む仏像。情愛と精美を宿すまなざしが写る一葉に、遙かな時空を越えた幾万の祈りが浮かび上がります。大和の仏像と向き合い六十年。写真家・小川光三さんの原点と流儀に迫ります。

仏像の癒し、写真の力に 魅せられて父の道を継ぐ

奈良公園へと延びる道路沿いに、小川さんが代表を務める飛鳥園があります。飛鳥園は、日本における仏像写真を確立した小川

晴暘せいよう氏が大正十一年（一九二二）に設立。仏像など文化財や寺院に関する撮影、出版、写真の販売を行っています。昭和三年（一九二八）生まれの小川さんは晴暘氏の三男。父が撮影した仏像写真に囲まれて育ち、やがて父の道を受け継ぐこととなります。

「終戦間近の昭和十九年ごろ、飛鳥園で店番をしていると、若い学生が次々と仏像の写真を買いに来るんです。『きれいなお顔の仏像がいい』と。仏像の美しさが戦地へ動員される学徒の慰めになったのでしょうか」

幼少期からそばにあった写真の中の仏像。父が撮った仏像写真を握り締めて出陣する学徒。「絵描きになりたかった」と話す小川さんですが、原風景には写真の力と記憶がありました。

父から学んだのは暗室技術と、写真の枚数は多く撮るべきではないということ。数少ない父の助言が、小川さんに大きな影響を与えてきました。仏像を中心に貴重な文化財を撮り続けて六十年。撮影の活力の泉は尽きることがありません。

仏像の内面にある 祈りと心を写したい

仏像は祈りの造形であり、日本の仏教精神の拠り所です。仏像を撮る行為は、仏像が内包する幾万の祈りや祖先の心を表現すること。小川さんは「一点」と「一瞬」に集中します。

「一点」とは構図。写真という

限られた四角の世界で写すのは全身なのか、横顔か。お腹の位置から見上げて撮るのか。最も美しく見える「一点」を選択する責任は写真家にあります。

「一瞬」とは光。仏師はどのような光線で見られるかを意識して仏像を造ったのだらうと思いを巡らす小川さん。太陽光を鏡やレフ板に反射させてほの暗い本堂に誘い込むなど、可能な限り「自然光」にこだわります。

「仏像を写真で美しく見せるには、どれだけその仏像に感動できるかが大切です。私の写真に対する感じ方は人それぞれだと思います。仏像を見ることで精神の高揚があれば、その人は幸せ。仏師も喜ぶでしょうし、私もうれしい」

仏像は単なる彫像ではなく、祈りや畏敬けいが込められた礼拝の対象。そんな思いで見つめると、信仰に希薄な現代人も、祈りや覚悟、すべてを眼前の仏像に委ねるのではないのでしょうか。

「仏像に秘められている祈りや願いが、写真を見る人に分かるように撮影したい」と小川さんは言います。その思いは、飛鳥園で受け継がれる流儀でもあります。仏像の内面に焦点を当て、小川さんもまた祈りながらシャッターを切り続けます。



唐招提寺金堂 千手観音立像



Profile

1928年奈良生まれ。1950年、父晴暘氏の後を受けて飛鳥園を継ぎ、古美術写真の道へ。大和を中心とする古代文化の研究にも情熱を燃やす。主な著書・写真集に『大和の原像』（大和書房）、『飛鳥園仏像写真百選—正・統一』（学生社）、『魅惑の仏像』全28巻（毎日新聞社）、『仏像』（山と溪谷社）などがある。2004～2007年にかけて、フランス、イタリア、ドイツで仏像写真展を開催。株式会社飛鳥園代表取締役。

大和郡山市

奈良
県立 民俗博物館
大和民俗公園

野外を探索するのに適したシーズンになりました。今回は豊かな自然と古民家や民俗資料を巡ろうという趣向です。大和郡山市の市街地からちよつと足を延ばして大和民俗公園を訪ねました。



緑に囲まれた丘陵地と古民家

大和民俗公園は、郡山城跡から車で約五分、奈良盆地と生駒山地に挟まれた矢田丘陵のふもとにあります。二六・六杉の敷地に、アカマツやクヌギなどの雑木自然林、アジサイや花ショウブ、サザンカなど季節の花々と梅林が広がり、散策や自然観察が自由に楽しめます。

正面入口を入ると、風格に富む古民家に引きつけられます。並んで建つのは、国の重要文化財「旧白井家住宅」と県指定文化財「旧鹿沼家住宅」。どちらも格子構えが見事な町屋です。

公園内にはこのような十八世紀前半〜十九世紀前半建築の古民家が「町屋」「国中くんなか（奈良盆地）」「宇陀・東山」「吉野」の四集落

に分けて移築復元されています。

古民家に入ると、当たり前のように土間とかまどがあり、柱や梁は頼もしい太さ。当時の生活の匂いや音が届いてきそうです。

構造に注目すると、地域性の相違が見えてきます。「国中」は蔵や離れ座敷が復元され、屋根の一部が瓦葺。当時から都市部だった現れです。「宇陀・東山」は重厚な茅葺屋根。「吉野」の民家は杉皮葺の屋根を石が押さえていて、土壁や土間があります。急峻な山地に適応したカタチなのでしょう。

いずれも地域の風土に溶け込んだ居住性、機能性を備えています。「かまどで何を煮炊きしたのだろう?」「茅葺の修繕はたいへんな作業だったのだろうな」などと想像が膨らみます。





常設展では人々の仕事や衣食住を紹介する多彩な民具・資料が展示されています。

貴重な生活文化財が勢ぞろい

大和民俗公園の中心的役割を果たしているのが、一九七四年に開館した奈良県立民俗博物館です。点在する古民家集落は言うなれば、博物館の野外展示といったところでしょうか。

民俗博物館では、奈良の先人たちが日常生活の中で創造し、改良工夫を重ねてきた生活用具や実用的な知恵など、さまざまな民俗資料を収集・保存・研究。



奈良と暮らしに関する企画展を定期的で開催しています。

常設展や企画展で展示公開しています。

常設展「大和のくらし」では、奈良を奈良盆地・大和高原・宇陀山地・吉野山地に分け、各地域の暮らしを支えた生業や産業を紹介。奈良盆地の稲作、大和高原の茶業、吉野山地の林業について、機械化が進んだ一九七〇年代以前の様子を実際に使われた民具や再現模型で学ぶことができ、館内をひと巡りすれば、今まで知らなかった奈良が見えてくるかもしれません。

古代の文化遺産が集う奈良県ですが、大和民俗公園をこうして探索してみると、奈良県の民俗文化財も魅力的です。自然と風土に正直だった時代の民衆の暮らしぶりが、今にもよみがえってくるような場所でした。

奈良の伝統的住宅群の数々をラインナップ

江戸時代の伝統的な民家は自由に見学できます。それぞれに趣向が凝らされ、どれも必見。町屋集落から吉野集落まで徒歩10分程度です。

1 町屋集落



旧白井家(重要文化財)



旧鹿沼家(県指定文化財)



旧荻原家(県指定文化財)・旧赤土家離座敷



旧吉川家(県指定文化財)・旧西川家土蔵

3 宇陀・東山集落



旧松井家(県指定文化財)



旧岩本家(重要文化財)



旧八重川家(県指定文化財)

4 吉野集落



旧前坊家(県指定文化財)



旧木村家(県指定文化財)



奈良県立民俗博物館

〒639-1058大和郡山市矢田町545 TEL.0743-53-3171 FAX.0743-53-3173
 開館時間:午前9時~午後5時(入館4時30分まで)
 博物館観覧料:個人 大人200円 学生150円 小人70円
 団体 大人150円 学生100円 小人50円(団体は20名以上)
 無料:65才以上の方、身障者の方、土曜日の小学生、中学生、高校生
 ※車椅子7台用意しております。必要な方は、博物館受付にお越しください。
 休館日:毎週月曜日(祝日・振替休日のときは、次の平日)、年末年始(12月28日~1月4日)

大和民俗公園・古民家・駐車場

古民家公開時間:午前9時~午後4時
 大和民俗公園・古民家への入園または見学は無料です。
 駐車場:駐車料金は無料です。
 午前8時30分~午後5時30分(6月~9月は午後7時まで利用することができます)
 ※駐車台数 普通乗用車:118台 バス:18台 身障者用3台(身障者用トイレ有ります)

奈良の伝統工芸 12

三 宝

吉野の里に受け継がれる技巧の矜持

神仏への祈りが万人の日常だった時代から奈良吉野に伝わる「三宝」の技。献上物や供物を恭しく運ぶ台を指し、鏡餅や月見団子を乗せる台でも通じやすい。吉野松の無垢な風合いが悠久の技巧を際立たせている。

天皇への献上物の器として使
用されたのが始まりと言われて
いる三宝。その歴史は古く、南
北朝時代、後醍醐天皇が奈良吉
野に都を移された時にまで遡り
ます。明治以降は、お正月の鏡

餅を飾る鏡台として定着してお
り、新年の年神様にお餅をお供
えして、その年を無事平穩に過
ごせますようにと、願いをか
けてお祈りするために使われる
ようになりました。また、家の

新築や結婚、豊作、豊漁などの慶事の年や厄年には、新しい三宝を取り替えて新年を迎えれば、その年の年神様が一家の安全を守り、幾久しき富貴円満を授け、子孫繁栄すると伝えられています。

三宝の名前の由来は、胴（台）の三方向に穴が開いているところからつけられたと言われているが、本来「三方」と書くのが正しいとされていますが、仏法僧の三宝に由来するとされているところから「三宝」と書かれることが多いようです。三宝は、折敷と穴が開いた胴（台）とで成り立っています。胴（台）に

開いた穴は「刳型」または「眼象」と呼ばれ、宝珠の形に彫られていきます。宝珠とは、頭部がとがり、その左右両側から炎炎が燃え上がっている状態にかたどった玉のことを言います。

三宝は古くから奈良県吉野郡下市町において生産されてきました。明治初期には技術者が和歌山や近郷から集まり、三宝が多く製造されるようになりましたが、現在下市町では四軒の生産者で行われています。その四軒で国内シェアの約八十〜九十%を占めており、年間では約十七万個を作られるそうです。今回その中の一人である北浦孝治氏【北浦木工所代表取締役】にお話を伺いました。

北浦氏は、三十年以上にわたる三宝の製造を行い、先代からの技を今に伝承されている全国でも数少ない職人の一人です。三宝作りは、艶・粘り・香りと三拍子そろった厳選の吉野松材を使用し、すべて手作りで作られており、約十五の工程を経て完成に至ります。

中でも三宝を曲げる部分では、皮一枚を残して加工するのが難しく、熟練の技量を要すると北浦氏は語ります。

また、工程の中で出る松の端材で積木やパズル等を作製し、



その他の作品

吉野桜の端材と伝統工芸品の三宝づくりで培った技巧を応用して、さまざまなアイデア商品を生産しています。北浦木工所近郊の道の駅で手に入ります。



押寿司箱

天然木の押寿司箱ならベタつかず、ふっくらとしたきれいな押寿司が出来ます。



壁掛け

玄関やリビングのちょっとしたインテリアに。手描きの絵が彩りと温みを感じさせます。



弁当箱

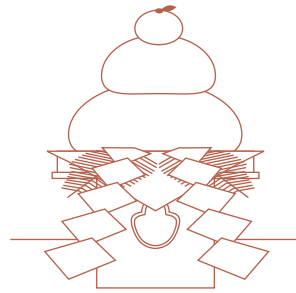
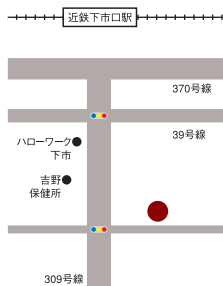
六角形の重箱タイプのお弁当箱。吉野桜の木目を生かして素朴でありながら、使い勝手も良さそうです。



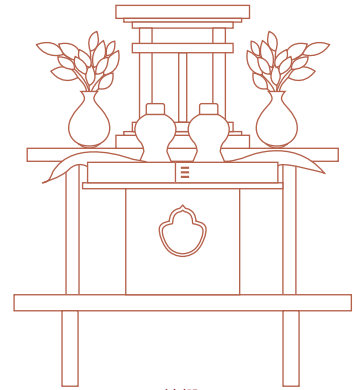
代表取締役 北浦 孝治

(株)北浦木工所

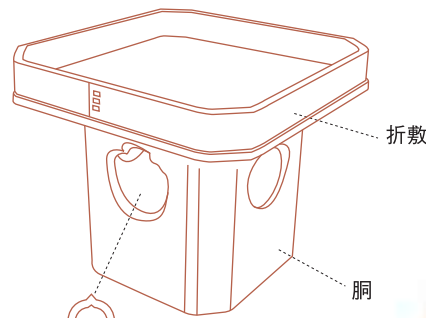
〒638-0041 奈良県吉野郡下市町大字下市899-2
TEL 0747-52-7096



正月
鏡餅を乗せる台としてお馴染です。



神棚
御神酒や鏡餅などを乗せて供えます。



割型または
眼象



宝珠

私たちの身近なところで、宝珠は、仏塔や仏堂の頂上や橋の欄干などの建造物の装飾としてよく見受けられます。



[板足折敷]

資源の有効利用をされています。他にも奈良の名物である柿の葉寿司の型や、置き飾り等、アイデア商品を次々と商品化され、道の駅で販売されています。

一方、最近では三宝の家庭での使用率が低くなってきており、特に鏡台は年々プラスチック製品におされているようで、寺社での使用は無くなることはないが、家庭での普及率を伸ばすことが今後の課題だと話して下さいます。

三宝は、奈良県の伝統工芸品としてだけでなく、日本の伝統文化として、古くから受け継がれてきました。継承の一助となるよう、また、次世代へ古き良き伝統を伝えていかなければならないと、三宝に対する熱い思いを語って頂きました。

●奈良の伝統工芸は勝手ながら今号をもちまして、終了とさせていただきます。全12回と長きに渡りご愛読頂きました皆様に感謝申し上げます。

三宝はこんなところで使われています。

印刷文化逍遙 21

週刊誌の歴史

詳しくは知らないが、週刊誌とは大体新聞社の付帯事業として、たとえば朝日新聞からは「週刊朝日」が、毎日新聞からは「サンデー毎日」が発行されてきた。今はほとんど週刊誌を買わないので、現在も引き続き発行されているかどうかは知らない。^{*1}

その他、「週刊読売」「週刊サンケイ」などがあったことを記憶している。^{*2} また出版社サイドでは「週刊現代」（講談社）や「週刊新潮」（新潮社）、「週刊大衆」（双葉社）、「週刊東洋経済」（東洋経済新報社）^{*3}などを時々購入したことがある。

しかし、週刊誌の中には芸能界のスキヤンダル等を掲載して物議を醸したものもあり、書かれた方は迷惑だったことだろう。本来は週刊誌といえは新聞と

は別の編集方針があり、単に読者の気を惹くことだけではないことは確かである。たとえば「週刊新潮」では、一九五六年の創刊号から、五味康祐の「柳生武芸帳」などの連載が始まって話題になったこともあった。^{*4}

これは、週刊誌に小説という場を提供した出版社の成功策の一つであり、以後、書き下しではなしに連載をまとめて一冊の小説を産むという方策の一つになったことは確かである。

ほかにも柴田錬三郎の「眠狂四郎」シリーズが人気をさらったことを、今でも覚えている。^{*4} もう一つ、読者の人気をさらったものにクイズがあった。ハガキを何枚も買ってきて応募した覚えがある人もいるだろう。

またヌードモデルのグラビアページに夢中になったこともある。今から思うと何ということもないのだが、これも若さというもので、今思い出すと恥ずか

週刊誌の特徴

写真・挿絵

人気のあったグラビアページだけでなく、社会現象や政治を皮肉った風刺画も多く掲載され、読後の痛快感を誘っていました。



書体

今の時代程書体が無い活版時代では、ゴシック体か明朝体の2種類で構成されていたため、見た目が単調なものがほとんどです。

特集
奈良古都伝説

タイトル

週刊誌に限らず雑誌のタイトルは端的で直球的。社名を冠するなど、会社を代表する意気込みで制作されていることがうかがえます。



記事内容

新聞社系は社員記者、出版社系はフリー記者が記事を書くケースが多いようです。印刷の高速化・パソコンの普及などにより、「あの出来事がもう雑誌に載ってる!」と驚くことも珍しくありません。

見出し

見出しはインパクトが大切です。事件、芸能、政治、文化、何であれ本文を読んでもらえるか否かが見出しで決まります。

表紙

表紙には当時の人気女優や政治に関する写真が掲載されました。この手法は現代も変わっていません。

価格

1956年の「週刊新潮」創刊号は30円。1922年の「週刊朝日」(当時は「旬刊朝日」)創刊号は当時のコーヒー1杯と同じ10銭でした。

しい。

奈良県には文化財の遺跡が散在していて、今も発掘の話題に欠くことがない。たとえば古代に登場する女王卑弥呼の遺跡である。

ほんの少し前も桜井市の某所でその遺跡が見つかったということであるが、詳しいことは分からないままである。

振り返ってみると、卑弥呼関係の本も、いつのまにか十冊を超えているが、どの本にもそれらしいことが書いてあって、どれもが真実か判じ難い。しかし、読者はそんなところに惹かれるのか、性懲りもなく本を買ってくるから世話はないのである。

さて、いつのまにか本題から逸脱してしまった。ところで、週刊誌はいつごろ発刊されたのだろうか。明治か大正か。これには図書館にでも行かなければ判然としないが、宙で覚えているのが残念である。

変わったところでは「週刊漫画」というのを昔買った記憶があるが、今も発刊されているかどうかは知らない。また調べれば、もっと面白いものが見つかるかもしれない。

硬いイメージが抜けきれないのは「週刊朝日」である。この雑誌は何が楽しみかといえば「週

刊図書館」という書評のページであった。この書評はいずれも辛口で、厳しい斬り口に魅力があった。

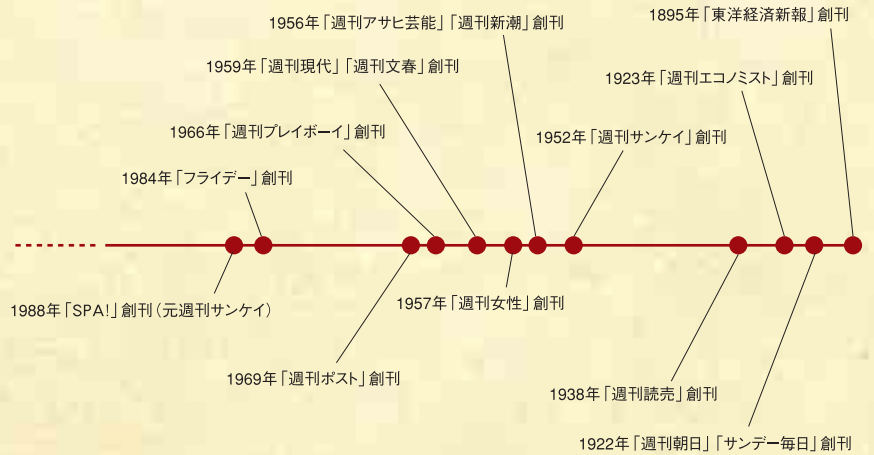
ただ、書評もあまり親切すぎると買って読んでみたいとは思わなくなり、ある程度省略をきかさないと、返って書評が仇となってしまうことがある。

ところで今は印刷技術も発達し、それこそ輪転機によってあっという間に印刷されてしまうが、昔はもつとゆっくりで、仕上がるまでには時間がかかった。それを考えると、まるで夢のような速さで一冊の週刊誌ができるから、有難味が感じられなくなったことも事実である。

このごろはグラビアページは言うに及ばず、カラーページに至るまで、実に美しく印刷されているから感心する外はない。おそらく日本の印刷技術は今や世界一であろう。

その世界一のスピードと美しさを以て読者に提供されるのだから、まさに印刷日本の誇りは最たるものがあるろう。

話をもとに戻そう。残念ながら週刊誌といえばやはり消耗品で、めったに保存はせず、大抵は古新聞とともに捨ててしまう。考えてみると勿体ないことだが、これが週刊誌の行く末である。



といっても、いずれ再生紙となる運命にあるのだ。

要は本に読まれずに徹底して本を読みきることである。週刊誌と同じで、読んだあとは捨てようがどうしようが自由である。でも若い人はやはり古典を読んでもほしい。

ここまで書いてきて、果たして編集者の意に答えられたか否か。もとより覚束ないが、今となってはどうしようもない。



嘉瀬井 整夫

【かせい ただお】
1934年京都市に生まれる。
1949年より94年まで印刷産業に従事。
奈良県立短期大学(現奈良県立大学)卒業。

主著「井伏鱒二私論」
「奈良大和路文学散歩」
「奈良高畑日記抄」ほか。
文芸評論家。

※1
1922年創刊の「週刊朝日」「サンデー毎日」も現在も毎週発刊中。高校野球の春の選抜(毎日新聞社主催)、夏の選手権(朝日新聞社主催)に合わせて発行される増刊号も人気が高い。

※2
1938年創刊の「週刊読売」は2000年に「読売ウイークリー」となった後、2008年12月に休刊。「週刊サンケイ」は1988年に全面リニューアルし、「SPA!」に引き継がれています。

※3
現在も発刊される週刊誌の最古参は「週刊東洋経済」(東洋経済新報社)で、1895年創刊の旬刊「東洋経済新報」が前身。1919年10月から週刊発行されています。

※4
出版社系週刊誌は、出版社の強みを生かして次々と人気小説を輩出。「週刊新潮」の五味康祐と柴田錬三郎の小説は剣豪ブームを巻き起こしました。

特集

奈良の城

信貴山城

奈良にも多くの城が存在した。時代の流れと共にそれは城跡となり、私達の心から忘れ去られようとした。再びその存在を知り、そこに息づくエピソードを紐解く。それは、私達のルーツを知ることになる。



信貴山城跡実測図(平群町教育委員会提供)

大和国と河内国を分かち生駒山地の南域に、信貴山(標高四三七m)が端正な山容を見せています。十六世紀後半の戦国期、山頂を中心に天守櫓、一〇〇以上の曲輪などを擁した南北七〇〇m、東西五五〇mに達する城郭が築かれていました。今となつては想像するしかありませんが、堅牢にして壮大な山城だったことでしょう。

信貴山城を語る上で重要な人物がいます。戦国乱世に生きた松永久秀^{*1}です。久秀は一五五九年に信貴山城に入り、後に多聞城(奈良市)を築いてこの二城を中心に大和国を治めました。一五六五年に將軍足利義輝を謀殺し(永禄の変)、一五六七年には戦火に乗じて東大寺大仏殿を焼き払うなど剛腕手法で勢力を増強。しかし、織田信長への二度にわたる背信が破滅を招き、信長から「譲れば許す」と言われた「平蜘蛛茶釜^{*2}」を粉砕して自決したと伝わります。

信貴山城は、久秀と同じく波乱万丈の人生でした。一五三六年に木沢長政が城郭



信貴山城全景

信貴山城跡周辺



信貴山頂の空鉢護法堂 空鉢護法堂付近の城址銘碑



信貴山城跡 信貴山 信貴山城・松永屋敷 東側門跡と土塁(西北西より)

聖徳太子によって「信じるべき貴ぶべき」山として名付けられた信貴山。四季折々の自然が楽しみ、信貴・生駒国定公園に指定されています。自然の中、のんびりとした非日常を楽しんでみませんか？



信貴山朝護孫子寺本堂



アクセス

近鉄生駒線・信貴山下駅から奈良交通バス12分、信貴山行き終点「信貴山」下車。
近鉄信貴線・信貴山口駅から西信貴ケーブルに乗り換え、高山山駅下車。近鉄バス信貴山門行き終点下車、信貴山頂まで徒歩約1時間

※1 松永久秀
出身地は山城国とも播磨国ともいわれる。はじめ三好長慶に仕えたが、次第に実力を増し、長慶の死後は三好三人衆とともに第13代将軍・足利義輝を殺害して畿内を支配した。しかし織田信長が義輝の弟・足利義昭を奉じて上洛してくると、信長に降伏して家臣となる。その後、信長に背いたため、織田軍勢に攻められ、信貴山城にて文獻上では日本初となる爆死によって自害した。

※2 平蜘蛛茶釜
蜘蛛が這いつくばっているような形をしていたことからこの名がある。信長が獲得に執念を燃やすほどの名茶釜だったとされる。



※3 信貴山朝護孫子寺
587年、聖徳太子により建立されたといわれる毘沙門天王の総本山。太子が寅の年の寅の日、寅の刻に現れた毘沙門天を感じし祀ったことがルーツという。標高437mの信貴山の中腹に位置し、毘沙門天の使いである寅の巨大な張り子が境内にあることで有名。当寺に伝わる、平安末期成立の国宝「信貴山縁起」は我が国の絵巻物の最高傑作の1つに挙げられる。

を築きますが、わずか六年後、長政が河内太平寺の戦いで三好長慶らに敗れ、落城してしまいます。大和と河内の国境という要衝の立地に目を付けたのが、長慶の下で勢力を伸ばしてきた久秀でした。

信貴山城は久秀によって復権しますが、三好家との対立が深まった一五六八年に三好康長に攻められ、二度目の落城。それでも、久秀は信貴山城を見捨てず、すぐに奪還に成功します。しかし、安泰は長く続きません。一五七

七年に織田軍勢に包囲され、みたび落城。信貴山城は山城としての幕を閉じました。

今、静かに山と森に埋もれる信貴山城。本丸があった山頂には朝護孫子寺^{※3}の空鉢護法堂が建ちます。境内から道程約六〇〇mの格好のハイキングルートです。主家であった三好家のみ込み、機を見ては信長に帰服したり背いたり。大和盆地を眺望する信貴山城で、久秀はどんな夢を見ていたのでしょうか。

命が吹き込まれる

木森があり



若草山から遠望

Imajin21

創今
造人

悠久の歴史の流れ、古の都は
今も、その面影を色濃く残す
いくつものドラマがあり
新たな時代が生まれた
そこから先人の英知を知り
人を見つめ直す
そして「今」を創造す

樹が育ち

KYODO SEIHAN PRINTING

KSP

そして紙ができ



私たちは、平城遷都1300年
記念事業を応援しています。



ミックス品
責任ある森林管理のマーク
www.fsc.org Cert no. SA-COC-001747
© 1996 Forest Stewardship Council

本誌は、「FSCミックス認証紙」を使用しています。



PRINTED WITH
SOYINK™